名寄市病誌　6：63～64，1998

看護研究

持続的外来腹膜透析法（CAPD）導入に際して術前外来指導を実施した1例

峯　秀子　　近藤千枝子　　早川ゆみ子　　岩井照代

はじめに

全国的に腎不全患者は年々増加の傾向にあり、それに伴い持続的外来腹膜透析法（CAPD）もまた増加している。

CAPDは在宅療法のなかでも特に自己管理が必要とされ、社会復帰を目的として発達してきた。当院でも血液透析（HD）からCAPDへの移行の希望があり、実施することとなった。

しかしながらCAPDの実施には、患者さんの知識・理解に基づく自己管理が重要である。従来は術後の指導が一般的であったが、その問題点としては1）入院期間の延長と社会復帰の遅れ、2）入院・手術・術後の治療に対する不安、3）入院・外来における一貫した指導体制の欠如、などが挙げられる。

今回は私たちスタッフも初めての経験であり、円滑に治療法の移行がなされるよう、HDで通院中に術前の指導を試みたので報告する。

目　　的

従来の術後指導の問題点を解消するため、術前指導を行った。

1．外来にて指導することにより入院期間の短縮をはかる。
2．CAPDについて一応の理解を持たせる。
3．手技・操作を習得しておく。
4．今後に対する不安を軽減する。
5．CAPDの維持管理のために外来看護婦による一貫した指導を行う。

以上の5点を指導の目的とした。

名寄市立総合病院　看護局人工透析室

事例紹介

50歳、女性、未婚
既往に糖尿病、右眼網膜剥離あり
透析経過

1993年9月	糖尿病性腎症・慢性腎不全、当院泌尿器科入院。
1993年10月13日	HD導入。
1993年10月26日	左前腕内シャント作成、維持透析開始。
1996年6月10日	スケジュール表により外来指導開始。
1996年7月23日	チュービング手術施行、CAPD開始。

指導方法および経過

1996年6月10日から、CAPD患者教育スケジュール（表1）に基いて、外来透析日に指導を開始した。

1週目はしおり・ビデオの貸し出しを行い、具体的にイメージをもって貰うことと、基本的原理について説明。

2週目は腹膜炎、出口感染、トンネル感染などの合併症について説明するとともに清潔・不潔の意義について指導。

3週目はしおり、ビデオを用いて実際にチューブの接続練習を行った。しかしビデオでは実感がないとのことで、実際にカテーテル挿入部位を右側腹部に想定し、接続チューブを固定し練習開始。

4週目は実際に自宅に資材を持ち帰り練習する。しかし1人では接続チューブが不潔になったり、セーフダップに入らなかったりしたため、看護婦も自ら右側腹部にチューブを固定し共に操作を繰り返すことで患者さんの不安も軽減。

5週目は実際のカテーテル挿入位置を決定。
6週目はCAPDチュービングを実施した。

表1. CAPD患者教育スケジュール

1週目	・資料配付　CAPDのしおり ・ビデオの貸出 ・最終日①腹膜について②原理についての説明
2週目	合併症について ・腹膜炎について ・出口部感染・トンネル感染について ・清潔・不潔について
3週目	・手技・操作のしおり ・ビデオ貸出 ・最終日にツインバンクシステム操作手順資材貸出 ・接続チューブセーフダップ実際にモデル練習
4週目	・自宅に接続チューブセーブダップを持ち帰り練習 ・カテーテルケア、出口ケアの資料配付 ・シャワー浴の指導 ・最終日メーカーによる操作手順の最後のチェック
5週目	・カテーテルの位置を医師、患者と共に決定 ・異常・緊急事態とその対応について
6週目	・チュービング

結　　果

以上の経過で、導入前に外来指導を行った結果、入院期間は14日間、手技操作も習得出来、不安なくCAPDが開始できた。

考　　察

CAPDは、自分自身で管理が必要な一つの在宅医療であり、精神的な不安が大きい。この事例に関して、職場復帰が遅延することは、職場で責任ある立場の患者さんのため、特に配慮する必要があった。

指導中に小さな問題はあったが、本人から「一連の操作を、担当者が変わることなく学べてわかりやすかった」、「自宅に帰っても安心だ」、「がんばります」などの言葉を聞くことができた。HDで通院中にCAPDの知識・技術を習得することでスムーズに移行することと、コミュニケーションが確立している透析室の外来看護婦による指導が、患者さんにとってCAPDを維持していく自信となったものと考えられた。

しかしこの患者さんは50歳と年齢も若く、理解力もあり、意欲があったことが、指導する側の助けとなった。今後は種々の背景を有した患者さん個々の個別性を考え、指導方法を検討していきたい。

お わ り に

今後もCAPD療法の選択は患者さんの社会復帰を目指す意味においても重要になるため、患者教育は不可欠となる。今回の学びをもとに、これからも外来通院中に教育指導を行うことにより、病棟との架け橋となり患者さんに効果的に関わることで、さらにCAPD患者さんの支援にあたっていきたい。

本稿の要旨は、平成9年10月の第36回全国自治体病院学会（山形県）において発表した。